

離島の介護サービスを 充実させよう

多くの離島では、高齢化率が高く、介護サービスの充実が望まれています。残念ながら全国的に小さな離島ほど、介護サービスが行き届いていないというのが実態のようです。

上関町の場合は、本土と橋でつながっている長島に介護施設がありますが、離島である祝島や八島からは定期船を利用して行き来をする必要があるため、定期船の運行時刻による時間的制約や、天候による影響、港までの移動や定期船の乗り降りが介護度の高い高齢者ほど難しいなどの理由もあり、できれば島内にデイサービスやショートステイが可能な施設が出来て欲しいと望まれています。

離島においては、採算性や効率面の観点から民間事業者が参入しにくい状況にあることは確かですが、そのような状況の中でも、個人やNPOの努力で介護サービスを提供している島もあります。今回は、離島での介護サービスを実現している二つの例を紹介しましょう。

◎飛島（山形県）の例



2009年3月、山形県酒田市の日本海沖合にある離島「飛島（とびしま）」に、一組の家族が移り住み、介護事業所を立ち上げました。酒田市の市街地から島に移り住んだのは、渋谷聡さん（38）とわかさん（35）の夫婦と3人の子どもたちです。

飛島は酒田港から定期船で75分、周囲10キロの島で、2009年当時の島の人口は265人、その内65歳以上の高齢者は島の人口の6割を超えていましたが、介

護事業所はありませんでした。

運送会社で働いていた渋谷さんは、4年前から島によく釣りに来ていましたが、島からの帰りの船で、「島には高齢者が多いのに、介護施設がなく、介護が必要な状態になると、島を出て、市の介護施設に移るしかない」という話を聞いていました。そこで渋谷さんは、「お年寄りが最後まで島で暮らせる環境を作りたい」と、移住して介護サービスを始める決意をしたのです。

妻のわかさんは、特別養護老人ホームでの勤務や、ホームヘルパー、デイサービスの職員など多様な介護業務経験を持ち、介護福祉士を経て、飛島に移住する前年にはケアマネジャーの資格を取得しました。

そして、夫婦一人で立ち上げた介護事業所「和楽」。「和楽」の由来は、わかさんの「わ」を漢字にした「和」と、楽しいの「楽」。「わかさんを中心にみんなが楽しくなるような場をつくりたい」との思いを込めたものだそうです。

まず、合同会社 和楽は、訪問介護事業所の認可を取得。合わせて、もともとあった飛島総合センター（酒田市役所の出先機関）で行っていた酒田市特例事業（デイサービス・ショートステイ）の委託を受けて、島での介護事業開始の準備を始めました。

移住してすぐに全戸に挨拶周りを行った中で、最初のショートステイの依頼がありました。その後、デイサービスもスタート。たった一人でのサービス開始でしたが、利用して下さった方が、他の方にも勧めてくれたおかげで、少しずつ利用して下さる方が増えていったそうです。

事業開始から3年目をへらいまでは順調に利用者が増えていったようですが、逆に酒田市の委託料は年々カットされ、現

在は委託料はゼロ。「介護だけでは、やっていけない状況となり、いろいろなことを始めています。車のない人の移動手段の確保、船で運ばれてきた積み荷の運搬、そういう島民の困りごとを解決するため、事業化できることはしています。」とのこと。そうして立ち上げた事業が、飛島の島民のために、さらには、雇用に結びついていけばという願いもあるようです。

現在、介護事業所「和楽」は、渋谷さん夫妻と、ケアスタッフ1名、給食1名の計4名で運営。介護サービスとして、ショートステイを随時、デイサービスを週に2回開設しています。ユニークな点として、デイサービスやショートステイで行う健康運動やレクリエーションの代わりに、利用者さんたちが、今まで仕事としてやってきた「魚の下処理」や「畑作業」なども取り入れています。「要介護認定を受けていても、認知症でも、それらの作業は体が覚えていて、その手さばきは素晴らしいですし、イキイキとした表情を見ることが出来るのです。」とのこと。

合同会社 和楽では、「おばあちゃんたちの加工所事業」も手掛けており、渋谷さんは「作業をするおばあちゃん達（要介護認定者）が中心」が、真剣ながらも、おしゃべりを楽しみながら楽しんで作業をする姿を見ると、これこそが生きがいになっているように感じます。介護認定を受けた方でも働ける場所を作っていくことが、これからの介護での新しい形になればと思っ活動が続けています。」と話されています。

◎笠岡諸島（岡山県）の例



岡山県南西部、笠岡市沖にある笠岡諸島は大小31の島からなり、このうち7島が有人島です。ピーク時に1万人を超えていた7島

の人口は2千人を切り、高齢化率も約65%と、非常に高くなっています。

「このまま何もなかったら島は沈没してしまう」と将来を危惧した笠岡諸島有志によって、1997年に7島合同で「島の大運動会」が企画され、以降、運動会は毎年開催され、島民同士の交流につながっています。

2002年には、7島合同の島民組織「電脳笠岡ふるさ島づくり海社」が立ち上げられ、06年には、NPO法人格を取得するとともに、「NPO法人かさおか島づくり海社」と名称を変えました。

島づくり海社の女性たちは、以前から、島の高齢者の生活を支えるために、「島でデイサービスをやりたいね」とよく話していました。介護サービス事業を行うためには、法人組織が必要。そこで、島づくり海社がNPO法人格を申請するのを機に、06年8月から本格的に話し合いを始め、準備に取りかかりました。翌07年2月には、介護保険事業に参入することができ、北木島において個人所有の民家（空き家）を改築して、通所介護事業所「海社デイサービスほほえみ」を開所。40〜70歳代の島民7人がスタッフとなり（大半がヘルパー2級の資格を持つ）、週4日開設しています。1日当たりの定員は10人。入浴、歩行訓練、ゲームや歌などを楽しんでもらっています。さらに09年には北木島に「海社デイサービスすみれ」（週3日開設、定員10人）も開所。その後「だんだんの家（白石島）」「しらべの家（真鍋島）」と順に開設し、今では笠岡諸島内に計4か所運営しています。また、雇用創出・人材育成の一環として、行政と協働で介護ヘルパーの養成にも取り組んでいます。

◎「わいわいタイムス」10月号は10月2日（日）発行予定です。